

鹿沼の自然・栃木の旅

月報第25号

(2014年6月)



北光クラブ

自然観察クラブ 鹿沼

奥日光・新緑の太郎山ハイキング
～戦場ヶ原のワタスゲ・太郎山の高山植物等の観察～

初夏の山路のよさは、その頃の山路を歩いた人でなければ想像が出来ない。それは平地の四月末の新緑の頃の美しさなどとは比べものにならぬほどよい。

のみならず、山路の色の美しさには、平地では見られないすき透った水々しいものがある。新緑の色が特別に鮮かで、流れが透明だ。空気が冷たくすんでいる。

私はことしの早春の頃、上州から信州へと二日の旅をして、未だ芽ばえせぬ溪谷を辿りつつ、山々の斜面を蔽う新緑を想像し、その間を飾るつつじや藤や山梨の花を頭に浮べ、晩春から初夏にかけての溪谷を辿る旅の趣き深いことを考えた。

山村から山村へ、狭くなったり広くなったりする溪谷を歩き、やがて峠を越えて、又もや次の溪谷を訪ずれるという風な旅をやるほど愉快なことではない。そしてその間に偶然の温泉宿でもあれば、それが又、一層の面白さを添える。」

田部重治著『青葉の旅・落葉の旅』（昭和23年3月20日・東西出版社発行）

より

昨年6月の太郎山行では新薙ルートから山頂を目指す予定でしたが、悪天候のためやむなく断念しました。今年は山王峠からのルートに変えて、山王帽子山、小太郎を越えて太郎山を目指しましょう。登行標高差は784m。山王峠は新薙ルートの登山口よりも標高が高いものの、山王帽子山の下りがあるので、新薙ルートの登行標高差704mよりも80mほど高くなります。ちなみに古峰ヶ原三枚石新道（古峯神社より）の登行標高差は677m。新薙ルートはかなり急峻なところがあり、安全性を考えると山王ルートがお勧めです。また、小太郎～太郎山間の稜線上は高山植物が楽しみです。当初予定の6月8日が荒天のため22日に、雨天でさらに延期して、実施を目指しています。



日 時：7月13日（日）AM5:00 北小西門集合（解散はPM5:00 頃）

（雨天の場合は中止、またの機会を乞うご期待）

行 程：鹿沼——土沢——（日光宇都宮道路）——清滝（コンビニ）——赤沼
（WC）——山王峠…（70 分）…山王帽子山…（40 分）…
ハガタテの頭…（60 分）…小太郎…（30 分）…太郎山…（30 分）
…小太郎…（40 分）…ハガタテの頭…（50 分）…山王帽子山…
（60 分）…山王峠——鹿沼

服 装：長袖シャツ、長ズボン、防寒着、帽子、軍手、軽登山靴または運動靴
持ち物：リュックサック、水筒（ポット）、雨具（しっかりした物を）、
お手ふき、ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート、
おやつ、お弁当

必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、ストック、ヘッドランプ、
参考書（栃木の山150、栃木百名山ガイドブック等）、
植物図鑑（高山植物）、1/25,000 地形図は「男体山」

参加費：おとな 600 円、子ども 300 円（ガソリン代）

他に保険料（1 年間）おとな 1,300 円、子ども 800 円

問合せ＆申込み：阿部（携帯 090-1884-3774）

本号の内容

山行案内	奥日光・新緑の太郎山ハイキング ～戦場ヶ原のワタスゲ・太郎山の高山植物等の観察～	2
表紙の本	中西悟堂『野鳥と共に』	4
活動報告・1	鹿沼東大芦・長安寺より羽賀場山、お天気山	12
活動報告・2	東京、御岳山・日ノ出山ハイキング	14
活動報告・3	新湯富士とヨシ沼・大沼ハイキング ～亜高山帯の新緑の樹木と湿原植物の観察～	17
読者からいただいたおたより		20
こんな生きものいました		20
特別寄稿		21
愛書家のひとりごと	続・文庫本蒐集の愉しみ	22

中西悟堂『野鳥と共に』（昭和10年12月25日・巢林書房発行）

七、岳麓探鳥行

昭和九年六月二日、三日。日本野鳥の会主催の富士鳥巢見学会の記。

年々見に行っている、そのたびに新しく学ぶところのある富士須走^{すばしり}の鳥の生活を、文筆や彩管を持って居る人々に、新鮮な目で、それぞれの角度から見て貰ったらどうであろう。物ごとを粗末にしない人々が、あの数多い鳥の巢や鳥の歌を、どういう風に見、聞くことであろう。という考が起ったので、農林省の内田清之助博士に富士探鳥会のことを相談してみたところ、それは宜しかろう、自分も出かける、という御返事だった。次いで柳田國男先生にはかって見ると、先生は悦ばれて、是非やってもらいたい、家族も伴って行くからと、直ぐに同意された。それではというので、匆卒の間に支度をしたのが、6月2日、3日の岳麓行である。



集りはどうであろうかと気遣っていたが、当日の約束の時間には、特別の事故ある人を除いて、お誘いした大部分の人々が、修学旅行のように、東京駅に集合された。

猪川前橋放送局長には初対面であった。早晚上州沼田の迦葉山^{かしょうさん}で録音した声の仏法僧を、大変な早業で午前中に前橋に取寄せ、それを携えて午後1時までには東京駅に馳せつけられたのだそうである。須走へ持参して、宿の夜のつれづれに一行にきかせたいという御厚志である。

御殿場駅へは、かねて富士に滞在して居られた清棲伯爵と、農林省の松山資郎氏とが出迎えに出て居た。駅前の自動車溜りのところに人待ち顔に立って居たのは牧水夫人、若山喜志子氏であった。『幾山河越えさりゆかば』の牧水氏が存生であつたら、この探鳥行に、どんなに喜んで参加したろうと、今も尚ありありと目に残るあの人の微笑にほどけてゆく口許と、何とも言えぬ温かさのこもった声とを思いかえしている、各新聞社の記者諸君が私を包囲攻撃して、一行の名を問いはじめたので、私の追憶は形とならぬうちに引裂かれた。



でこぼこ道を、自動車は八瀬尾^{やせお}の苔雲莊^{たいうんそう}へと向ってゆく。苔雲莊へ着くと、ホトギスが鳴き、クロツグミが鳴き、コリリが鳴いて、そろそろ鳥気分である。前日から須走に居た竹野家立氏がやって来られた。農場主が設けてくれた好意の天幕に集って茶菓をしたためている一行に、内田博士は、あすの旅程を話している。が、雨もよいのうら寒い風が吹くので、一行は富士にかかる雲の様子を気にしている。軽快な服装の北原白秋氏が風邪をひきそうな

(次ページへ続く)

天候である。

一生懸命に仔を庇う狸を垣間見てから、樹の下で農場の人の狸や狐の話を聞き、
わさびだ山葵田を見学後、再び自動車をつらねて須走の米山館へゆく。



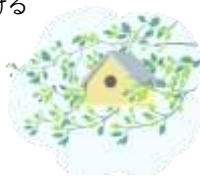
柳田先生は前日から一行を待って居た。荒木画伯と内田博士とが、清棲伯の自動車で今夜は山中ホテルへゆくと言う。ではその前にというので、すぐに茶菓をかこんで、猪川氏持参のレコードの仏法僧を聴く。円盤が廻ると、ブッポウ、ブッポウと、かすかに、哀調を帯びて、その鳥が鳴く。けさ迦葉山で鳴いていたその鳥を、夜に岳麓できけるとは便利な世になったものである。目をつぶってその声を傾聴していると、静寂な山の鳥の姿と共に、流動してやまぬ時世の姿が一個のモンスターの如くに眼底を過ぎてゆくのを覚える。



夕食がすむと高田^{こう}昂さんの、富士の鳥の話である。続いて兵^{ひょう}さんの鳥声模写である。ツツドリ、キジバトのうまさはどうであろう。オオルリに至っては『そうだそうだ』と合槌をうちたくなる。カラスの鳴声が出ると拍手が起った。前歯がかけて、折角の声の抜けるのが残念だという

『歯がぬけろばぬけるほど、楽に吹けますでさ』

と、兵さんは威張るでもなく、弁解するでもなく、ただ素朴に言う。この人には無条件降伏である。身体の間々から『そうだとも』と納得せざるを得ない。最早、仁に近いボン・ノム！ 此の人からは、むかしの森の風がそよ吹く。



雨戸の外は雨である。そのこえが、ひとしきり強くなると、杉村楚人冠さんが、これで安心した、と言う。なぜかと誰かがきくと、あすが晴だと義理にも鳥の巣を見に行かなくてはならぬ、降れば見なくても済むから助かるとのこと。杉村さんという人は面白い人だ。意表外のことを無難作に言っている。——そういうあいだにも、金澤氏はしきりに高田兄弟の横顔を素描していた。



そろそろ寝ようではないかと誰彼が言い出したのは、12時であった。新しい時代に、父として臨み、伯父として、後見者として臨んで居る人々が、此の夜ばかりは何十年かの昔にかえって、中学生のように、平等無差別に、ずらりと枕を並べた。私の隣は誰であった、というようなことが、後になっては、或いはめいめいの人の、なつかしい思い出となるかも知れない。この事だけでも、今度の行は無駄ではなかったと私は思った。

酒が入らなくては安眠が出来ないのであろう、北原氏是一同が床に就いたあとで帳場

(次ページへ続く)

に出て、囲炉裏の前でビールを始めた。私はそのおつきあいに出て、午前1時に就寝した。

○

6月3日の朝は、浅間神社で勢揃いをしたが、人数が多いので、内田、清棲、荒木3氏の、山中湖畔からの到着を待って、2班に別れた。1班は柳田國男、荒木十畝、北原白秋、金田一京助、内田清之助、清棲幸保、奥村博史、金澤秀之助、杉村楚人冠、菅原恒覧、穂積忠の諸氏に、苔雲荘の三橋小一郎、瀧口俊次郎両氏が加わり、高田昂さんが付添った。もう1班には戸川秋骨、窪田空穂、中村星湖、半田良平、若山喜志子、猪川城、松山資郎、内田清一郎、金田一春彦、柳田千枝子、柳田三千子、加来都、岡茂雄、松室重行の諸氏に高田兵さんと、昂さんの息子の重雄君が付添った。私は後の班に随行した。

○

鳥の巢は、勢揃いした浅間神社の境内から、もう始まっていた。神社の入口の桜の樹洞には黄鵠きせきれいが卵を抱いて居り、拝殿の裏側の長押の隅には大瑠璃おおるりが抱卵していた。

(次ページへ続く)

↓「新しい時代に、父として臨み、伯父として、後見者として臨んで居る」面々



この2つを手始めにして、この日見た巣は31個であったが、墓石の石扉の中につくった四十雀の巣、裸の雛のいる繡眼児の巣、青々とした柄長の巣（荒木十畝画伯はこの柄長の巣を写生された。本書の口絵にいただいたのがそれである）、寒天場の寒天を巣材にした黒鶉の巣、純白でぴかぴか光る仙台虫喰の卵、まっさらなお小瑠璃の卵、などには誰もが興味を持ち、或いは魅せられたようであった。又既に巣立ったあとの繡眼児の空巣が松のはやしにあったが、若山喜志子さんはその美しさに感動して居たようであった。



戸川さん、窪田さんの足の強いのにびっくりしたが、総じて誰彼の、物を知らうとするまじめさには感服した。中村星湖氏も半田良平氏も、1巣毎に手帳に留め、写生をし、鳥の歌をきくたびに、ハムブルな態度で記録をする。お誘いした甲斐があったと思った。ギルバート・ホワイトやハドスンの森林を、書物の上で逍遙している戸川先生は、イギリスの森から帰朝して古い日本をたずねるような様子で、熱心に注意を払って居られた。窪田さんは澄んだ心耳を愈々澄ませて黄鶉や仙台虫喰の歌を傾聴し、小さな生きものの営みをいとしんで居られる様子であった。



鳥と共に植物にも熱心なのは、内田さんの令息清一郎君と、金田一さんの令息春彦君と、柳田さんの令嬢とであった。清一郎さんはポケット型の植物辞典を取出して一々実物とひくらべていた。春彦さんと柳田千枝子さんとは、幾たびとなく草を私に示しては、これは何かと問われたが、そちらの方は専門外である。植物の宝庫を歩きながらその宝に親しむこと薄く、直ちに御返事出来ぬものが少なかった。加来都さんは、さまざまの鳥の声を、しきりに音譜に移していた。



品のいい小敦盛草や舞鶴草が、或る場所では群落をつくっていた。微雨が訪れ、代って日が訪れる。風が生れて孔雀羊歯がうなずく。天然林の静謐と、小さな騒擾の断続。霧のしずくの絶え間ない竹藪では、山椒からさがった苔と蜘蛛の糸とのハンモックで、繡眼児の雛が刻々に育ち、富士桜の密叢では、枯木に穿孔した赤啄木鳥や小雀が、せっせと雛に餌を運んでいる。目にあまるこの静寂の奥殿には、吾々の知らぬ猶お幾百の巣があるかも知れない。それらの生きものの周到な生活、卵が雛となり雛が巣立って行く日々の消息と不意に起るアクシデントを誰か悉く知り得よう。そうして、どの木も、どの草も、互いに協議をして種族の繁栄にいそんでいるように、無数の隣人となり合って枝を蔓らせ、葉を繁らせる。その黙った植物の生命の量感が、私を圧迫し、まじめにさせる。



林で吹く兵さんの鳥真似は、宿の座敷できくそれよりも、一層 真実に近いものだ。次々に起る鳥声を忙しく耳に集めて居た戸川さんが、「あ！ あれは何の鳥です」



と問われたのは、兵さんの吹くコガラであった。しばらくして私が、手近に筒鳥が来たなと思って振返った場所にいたのも、やはり兵さんであった。兵さんは黙ってついてくる。問われないうしろの方でポポ、ポポ、ポポポポポポ、ポポ、ポポと筒鳥を吹く。



ツッペ、ツッペ、ツッペと歯切れのいい鳥の音がする。「あれは何です」と梓書房の岡さんがきく。兵太郎老は、「四十雀です」と簡単に答える。

チク、チーと早口の歌がきこえる。岡さんは又兵さんにきく。「四十雀です」と兵さんが答える。チクチクチ、ジャーという音がする。岡さんが又たずねる。依然として「四十雀です」という答である。

こういう事が続けて五六回あった後で、「駄目だ。四十雀には負けた」と岡さんは匙を投げた。四十雀ですらも幾通りもの啼鳴がある。が、素朴な兵さんはそういう風に説明をしない。きかれれば単直に「四十雀です」を幾度でも、繰返している。そこで岡さんは混乱し、飽和状態になり、段々気が遠くなり、やがてほかの鳥の声も区別がなくなっただけで、鶯の声をきいて「あ、何でしょう」と私にきいた時は、岡さんの真面目極まる顔を見て、私は微笑をせずには居れなかった。岡さんと、兵さん。——この取合せはユウモラウスであった。



正午には、折から雨の絶え間の須走^{つつじ}躑躅園に、両班が申合せた通りに落合って、落葉松の青に囲まれた広い一角を染める、蓮華^{れんげ}躑躅のまんなかで、やはり2つの亭に別れて食事をした。

私どもの班に交って食事をした金田一さんが、午前中の見学の様子をしきりに話す。若山喜志子さんが宿屋から運ばせたムロアジの乾物に火がよく通っていないと言って、もう一度世話を焼く。これは沼津から持参された、一行への手土産なのだ。

記念撮影をしたいからと、両班に集って頂く。私がフィルターをかけたり、セルフタイマーを取りつけたりしている間に、荒木画伯は16ミリで、一足お先きに撮影をされる。一行のならぶうしろには、躑躅の緋と、唐松の青と、光を帯びた灰色の空間とを距てて、富士ならぬ青垣山が、肩から上を霧の中に隠している。奥村さんだけは撮影どころではなく、せっせと躑

躑躅園を油絵にして居た。

○

午後1時、両班は案内人だけを交換して、再び密林に分け入って行く。長身ぞろいの杉村楚人冠さんと、清棲伯と、金田一さん、羽織袴の柳田さんと荒木さんと菅原さん、内田博士の捕虫網、手帳を放さぬ白秋氏、というような一行のあとから、午後はそのらへ随行する兵さんが、全身善意に充ちた身体付きをして、だらりと番傘をさげながらゆく。

今度は昂さんが、こちらの組の先達である。

○

チブ、チブ、ヂューイ、——チブ、チブ、ヂューイと鳴く仙台虫喰の声は、誰の印象にも鮮明に残ったであろう。ツキヒホシ、ポイポイと鳴く三光鳥はどうであろうか。

あおじ
「青鴉は覚えました」と岡さんが言う。

ほおじろ
「頬白を少し崩したような鳴方ですね」

と私が答えると、「それはいかん。その頬白の方が分らんです」と、

やはりまだ岡さんは、飽和状態らしい。が、ジュウイチ、カッコウ、ホトギス、

ツツドリはよく覚えたという。うしろでは、その会話をきいて、口数の少ない松室さんがクスクスと笑っている。松山資郎氏もニコニコしている。旅の心はこだわるところがなく、鷹揚で、尋常である。おのずからな悦びのゆとりも備わっている。



○

一同が米山館へ戻ったのは午後4時であった。もう一度、寛いで茶を飲む時間は十分にあった。杉村さんはすぐに熱海へ、内田さんと荒木さんは一足先へ、北原氏と奥村氏とは旅鳥になって伊豆の方へ、若山喜志子さんは沼津のお宅へ、と夫々に先発されたあとで、一行は手土産の富士の山草、ツバメオモトや紅花一葉草や、敦盛草や、鈴虫草の包みを携えて、4台の自動車御殿場へと引返した。

これに続けて、「この1日に一行が見た鳥の巣のノート」として32種の鳥の記事と、「この2日間の歌反古」15首が書き添えられている。

月報16号に写真を掲載した1934年初夏の富士山麓探鳥会についての記述を、ちょっと長いのですが全文ご紹介しました。「日本野鳥の会」創立の頃、中西悟堂の幅広い交友関係から、鳥に興味を持っていた各界著名人が大勢参加した賑やかな様子がうかがえます。

中西悟堂(1895-1984)・主要著書目録

「啄木の詩歌と其一生」(交蘭社・1928.2)

「藁家と花」(日本詩人叢書・武蔵野隨筆集)(詩集社・1928)

「虫・鳥と生活する」(アルス・1932.7)

「山岳詩集」(朋文堂・1934.2)

「反轉現像・調色法・補力及び減力・寫眞印刷・建築寫眞

・植物寫眞・動物の生態寫眞」(共著)

(写真大系)(新光社・1935)

「野鳥と共に」(栄林書房・1935.12 のち角川文庫・1958)

「山の鳥類」(共著)(山岳講座第7巻)(共立社・1936.5)

「昆虫読本・上巻」(栄林書房・1936.7) 下巻は未発行

「野鳥ガイド 陸鳥篇」(日新書院・1938.3)

「野鳥と共に」(普及版)(日新書院・1940.7)

「武蔵野の鳥」(共著)(武蔵野)(科学主義工業社・1941.5)

「野禽の中に」(日新書院・1941.5)

「鳥虫歳時記」(高山書院・1941.6)

「野鳥を訪ねて」(自然観察叢書)(日新書院・1942.5) ※1

詩集「叢林の歌」(日新書院・1943.1)

「野鳥の世界」(目で見る社会科39)(毎日新聞社・1951)

「鳥の山旅」(山溪山岳叢書4)(山と溪谷社 1946.9)

「鳥影抄」(星書房・1949.5) ※2

「鳥を語る」(星書房・1949.5)

「野鳥と共に」(決定版)(講談社・1949.4)

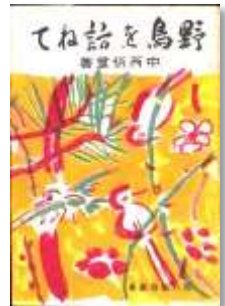
「鳥山河」(ジープ社・1950.9)

「虫のいろいろ」(中学生全集50)(筑摩書房・1951.7)

「野鳥と共に」(創元文庫)(創元社・1952.11)

「野鳥と生きて」(ダヴィッド社・1956.12) …日本エッセイスト・クラブ賞

「山と鳥」(コマクサ叢書6)(朋文堂・1957.4)



※1「野鳥を訪ねて」



※2「鳥影抄」



※3「定本野鳥記」

「定本野鳥記」(8巻+別巻、新版全16巻)(春秋社・1961~5年)※3

…読売文学賞

「原色 県花・県鳥」(共著)(東雲堂出版・1967.6)

歌集「蒔一つ落つ」(五月書房・1977.2)

「かみなりさま わが半生記」(永田書房・1980.12)

「野鳥開眼 真実の鞭」(永田書房・1993.12)

「愛鳥白伝 上・下」(平凡社ライブラリー)(平凡社・1993.11)



※ 中西悟堂から川田順(1882-1966、歌人)にあてて送られた昭和27年7月6日付のはがき。
悟堂は還暦前、野鳥を求めて盛んに行動しながら、文化人との交流も活発な様子うかがえる。

謹啓 全御歌歴を集約大観いたし得る古希御記念全歌集御上梓を心からお祝い申し上げます。御恵投を賜わりしこと厚く感謝いたします。

バードウィーク行事について富士、雲取山、越後〇〇岳等に登り居り、そのまま軽井沢へ夜着きました為、御挨拶遅引いたしました。7月末まで当所に居りますので、折〇の山居に御歌集甚だたのしみに、拝読いたし居ることと存じます。

不〇〇ながら御礼迄申し上げます。

7月6日

長野県軽井沢町

沓掛、星野温泉にて

中西悟堂

読解不能の文字(〇印)が多くすみません。
誤読御容赦。

自然観察クラブ 会費納入のお願い

- | | |
|-----------------------|--------|
| ☆ 年会費(個人または家族) | 1,800円 |
| 〃 (会報不要または直接取りに来られる方) | 600円 |

※ 会報はインターネットでご覧になれます。

☆ 会費の主な用途

会報発行・発送用諸経費(郵送料、封筒・印刷用紙、インク代等)、
プリンター保守費用、臨時催事の通信、その他

鹿沼東大芦・長安寺より羽賀場山、お天気山

4月20日（日） 天気・くもり

この冬の雪は鹿沼の市街地ではさほどではなかったものの、日光や、鹿沼でも山地帯では記録的なものであったらしく、特にスギが多く植えられている鹿沼の山では被害が多かったようである。

今回計画した羽賀場山もほとんどがスギ山なので、お天気山どころか羽賀場山まで登れるか、と心配しながら、長安寺（曹洞宗）の下の駐車場に車を置いて出発。参道の石積みの階段には一面にイワヒバが植えられていて、隙間を縫うように登る。住職にあいさつし、山道の様子を尋ねると、今日もすでに登っていった人がいるという。

なるほどスギの木は枝に積もった雪のためか、悉く縦に裂けたり、まるくしなった状態であるが、山道はすでにきれいに整備されており、快適な登山が楽しめた。途中に2本の送電線鉄塔があった。鹿沼で唯一の一等三角点を囲んで昼食。後から東京から来られたという10人ほどの登山隊も加わって、薄暗い静かな羽賀場山山頂にはわかに大賑わいとなった。お天気山はあきらめたが、咲いていた花は多く、ニリンソウ、フモトスミレ、トウゴクミツバツツジ、シキミ、ウグイスカグラ等のほか、カタクリ、シュランもわずかに見られた。

帰路、先発隊がカマド倉方面への道を進んでいってしまった。運よく携帯がつながったから事無きを得たが、自らの進むべき道の如何、山道に限らず、何時も思い見るのが大切である。



羽賀場山山頂にて
なぜか東京方面の人には人気の山

※ 参加者

小川知峻・裕月・恵美、佐々木伸二、
石崎隆史・裕子、阿部良司・みゆき（計8名）

※ 見た植物(50音順)

（草の花）アカネスミレ、エイザンスミレ、カキドオシ、カタクリ、キランソウ、シュンラン、セイヨウタンポポ、タチツボスミレ、タネツケバナ、ニリンソウ、

ハハコグサ、ヒメオドリコソウ、フモトスミレ、ホトケノザ、ミツバツチグリ、
ムラサキケマン、(葉っぱ) ツルリンドウ、トウゲシバ、ヤブレガサ、

(落葉広葉樹、❀は花が咲いていたもの) アオハダ、アカシデ、アワブキ、
イヌブナ、ウグイスカグラ❀、ウリカエデ、エゴノキ、オオウラジロノキ、
オトコヨウゾメ、クリ、クロモジ❀、コアジサイ、コナラ、
トウゴクミツバツツジ❀、ナツツバキ、ネジキ、ホオノキ、ミズキ、

ミツバアケビ❀、モミジイチゴ❀、ヤマザクラ❀、
ヤマツツジ❀、ヤマブキ❀、ヤマモミジ、リョウブ、
(常緑広葉樹) イヌツゲ、シキミ❀、ヒサカキ❀、
(針葉樹) アカマツ、コメツガ、スギ、ヒノキ、モミ



エイザンスミレ

❀ 聞こえた鳥

ウグイス、ヒガラ、ヒヨドリ、ホオジロ、ヤマガラ

❀ 羽賀場山の思い出写真集



長安寺正面↑

イワヒバに覆われた石段を登る



大雪の爪痕も痛々しい
杉の植林地に行く



送電線の鉄塔を2回回る
遠くから遠くへ電気が
送られていく風景
“鉄塔ファン”もいるそう



←大きなモミの木と
↳その周辺に散らばる
“モミの木ぼっくり”の鱗片
実の大きさが想像される



登山電車ごっこ？
子どもたちの元気な声が響く



送電線の保守のためか
登山道も植林地も比較的
よく整備されていた

東京、御岳山・日ノ出山ハイキング

5月3日（土） 天気・はれ

大型連休後半の1日、東京都民で賑わう新緑の奥多摩・御岳に、栃木からはるばる出かけてきました。当日は好天に恵まれ、JR 湘南新宿ラインから新宿でホリデー快速おくたま号に乗り換えるだけの比較的楽な行程を経て、これが東京かと思うほどの渓谷美を望む JR 青梅線・御嶽駅に降り立ちます。しかし同じように御岳山を目指す人々のあまりの行列にバスを諦めて、登山ケーブルの滝本駅まで歩くことにしました。緩やかな坂道を歩いて登り始めると、たちまち額から汗の粒が流れ始めます。沿道に咲く初夏の花々を早速チェック。

御岳山は山頂付近に 2000 年近い信仰の歴史がある武蔵御嶽神社と門前町が展開していて、ケーブルカーの便も良く、これで上がってしまえば続きの山へのルートも比較的楽にたどることができます。とは言え、神社境内にも長い長い石段が展開し、本殿にたどり着くのにもうひと汗。江戸の頃からは盗難除け・魔除けの「おいぬ様」（実は日本狼とか）としても親しまれ、ペットの犬連れの参拝者も多く見られます（ケーブルカーにはペットの乗り方の注意書きもありました）。

経路を外れた所でのんびり昼食を摂るなど既にかなり時間が過ぎ、あまりゆっくりもしてられません。と言いながらも、色とりどりの初夏の花を楽しみながら、よく整備された登山道をのどかに歩くことができました。

日ノ出山を経て養沢渓谷へ降りるという当初予定のコースは、その先のバス便が少ないからと、御嶽駅の臨時登山案内所でアドバイスを受けて変更、途中から道をそれてつるつる温泉方面に降りました。温泉からは機関車をかたどったユニークな連節バスが出ており、これに乗って JR 五日市線・武蔵五日市駅に向かいました。



長い石段を登り切った
武蔵御嶽神社本殿前で

✿ 参加者

小川知峻・裕月・真司・恵美、平井亜湖、野田 亨、石束ゆみ、石崎隆史・裕子、
阿部瑞穂・良司・みゆき（計 12 名）

✿ 咲いていた花（五十音順）

（草の花）アメリカフウロ、オオイヌノフグリ、
オトコヨウゾメ、オニタビラコ、カキドオシ、
カノコソウ、カラスノエンドウ、クサイチゴ、クサノオウ、コンロンソウ、
シャガ、セイヨウタンポポ、セリバヒエンソウ、センボンヤリ、タチツボスミレ、
チゴユリ、ナガバノスミレサイシン、ニガイチゴ、ニリンソウ、
ヒメオドリコソウ、フモトスミレ、ハウチャクソウ、マムシグサ（の仲間）、
ミツバツチグリ、ミヤマキケマン、ムラサキケマン（右上写真、白花？）、
モミジイチゴ、ヤマネコノメソウ、



（木の花）クロモジ、ツクバネウツギ、ツリバナ、ニワトコ、
ヒメウツギ、ミヤマシキミ、ヤマツツジ、ヤマブキ

✿ 見た樹木

アオキ、アカメガシワ、イタヤカエデ、イヌツゲ、
カジカエデ、ケヤキ、コゴメウツギ、コナラ、シナノキ、
シラカシ、シロダモ、タカオモミジ、ヒノキ、ホオノキ、モミ



✿ 見た鳥・聞いた鳥

ウグイス、オオルリ、カケス、ガビチョウ（右図と写真）、
カワガラス、キビタキ、シジュウカラ、ツツドリ、
トラツグミ、ヒガラ、ヒヨドリ、メジロ、ヤマガラ



JR 御嶽駅の古風な駅舎↑



そのすぐそばに展開する
御嶽渓谷→



ペットの犬も乗れる
御岳山ケーブル↑



山の上の御岳平→

✿ 参加者からいただいたおたより



日の出山まで行って来ました。とてもあ
つかったです。

でもちようじょうまで行ったら、けしきがよ
かったです。

下る時、かいだんをたくさんおりました。
少し足がいたくなかったけどがんばりました。

せんじょうがはらにもいってみたいです
す！ （小川裕月・北小3年・絵も）

電車に乗ったときは酔ってしまったけ
ど、楽しかったです。ケーブルカーま
での道のりがけっこうつらかったです。
そして、ケーブルカーを待っているとき
が結構暑かったです。

でも、山道は楽しかったです。でも、
石段がかなりてきとうに作ってあって、
とても困りました。そして、下山してい
るときに、西日が差しだし、

「帰れるかな。」

と思いました。でも無事に帰ることがで
きてよかったです。

そして、頂上のけしきは絶景でした。

でも、伸二くんが電車に乗りたくて、
さっさと下山してしまったので、とても残
念でした。

（小川知峻・北小5年）



↑御岳山頂の古風な御師の住宅と

↓門前町のたたずまい



↑日ノ出山頂からの関東平野の眺望

↓日ノ出山頂

よく整備された下山道

つるつる温泉から

武蔵五日市へ向かう

機関車型の連節バス



新湯富士とヨシ沼・大沼ハイキング
～亜高山帯の新緑の樹木と湿原植物の観察～
5月18日（日） 天気・はれ

ある植物同好会の観察会に参加して塩原のヨシ沼・大沼を訪れたのは15年ほど前のことです。その頃まだ砂利道だったヨシ沼の入口にバスを止め、長靴をはいた私たちは指導者の案内に従って木道もなにもない湿地に入って行きました。確か5月下旬、すでにショウジョウバカマの花は終わっていましたが、目的の植物は、たくさんとはいえぬものの、点々と生えていました。おそらく、県内ではめずらしい植物だったのだと思います。ところが、わざわざ湿地に入って教えてもらったその植物がなんであったのか思い出せない。その植物を調べるのが、今回の植物観察会の目的の一つでした。

ヨシ沼の入口を通る道路はすでに舗装され、駐車場もできていました。そこに掛けている案内板に、ミツガシワという植物の花の絵が描かれていました。「この花だったのか！」——それは栃木県内では珍しい植物でした。栃木県内では湿地自体少ないのですが、戦場ヶ原にもない、鬼怒沼にもない、そしてヨシ沼のすぐ隣の大沼にもない、貴重な植物なのでした。

深山の趣のある新湯富士では、エンレイソウ、マイヅルソウ、フデリンドウ等の花が見られ、山頂付近はアスナロやクロビ（ネズコ）の大木の原生林。大沼ではオオバタネツケバナ、クルマムグラ、ワチガイソウ等の花、そしてヨシ沼南岸には立派な木道が整備され、ミツガシワの白い花が、競い合うように咲いていました。アカハラ、クロツグミ、イカル、センダイムシクイ、エゾムシクイ、キビタキなどののどかなさえずりが、訪れる人の少ない、静かな谷間にひびいていました。



塩原大沼にて

※ 参加者

小川知峻、小島美穂、石崎隆史・裕子、阿部良司（計5名）

※ 見た植物(50音順) ♡は花が咲いていたもの

(車中から) アオダモ❀、ウワミズザクラ❀、トチノキ❀、

ニセアカシア❀、ヒメウツギ❀、ミズキ❀、ヤマツツジ❀、

(草本) エンレイソウ❀、オオバタネツケバナ❀、

クルマムグラ❀、ザゼンソウ、シシウド、

ショウジョウバカマ、セイヨウタンポポ❀、

タチツボスミレ❀、チゴユリ❀、ツクバネソウ、ツボスミレ❀、ツルネコノメソウ❀、

ノブキ、パイケイソウ、フキ❀、フクオウソウ、フタリシズカ、フデリンドウ❀、

マイヅルソウ❀、ミツガシワ❀ (右上写真)、ミツバツチグリ❀、ヤグルマソウ、

ヤマネコノメソウ❀、ワチガイソウ❀、

(樹木) アサダ、アサノハカエデ、アワブキ、エンコウカエデ、

オオイタヤメイゲツ、オオウラジロノキ、オオカメノキ❀、

オトコヨウゾメ、オヒョウ、カンボク、クリ、コシアブラ、

コミネカエデ、ズミ、チドリノキ、ツリバナ、ツルアジサイ、

トウゴクミツバツツジ❀、トチノキ、ナツツバキ、ナツハゼ、

ナナカマド、ネジキ、ハウチワカエデ、ハリギリ、ハンショウツル、ヒトツバカエデ、ブナ、

ホオノキ、ホツツジ、ミズナラ、ミズメ、ミネカエデ、ミヤマガマズミ、メギ、

ヤドリギ (右中写真)、ヤマウルシ、ヤマザクラ、ヤマモミジ、リョウブ、

(針葉樹) アカマツ、アスナロ、ウラジロモミ、カラマツ、クロビ、コメツガ



❀ 聞こえた鳥

アオゲラ?、アカハラ、イカル、ウグイス、エゾムシクイ、エナガ、オオルリ、キセキレイ、

キビタキ、クロツグミ、センダイムシクイ、ハシブトガラス、ヒガラ、ヒヨドリ、ホオジロ、

メジロ、ヤマガラ

❀ 塩原写真館



車窓から見えた
左より鶏頂山、西平岳、釈迦ヶ岳



← 新湯富士山頂

→ 大沼から見る新湯富士



✿ 初夏の山旅を彩る花たち(●御岳・●塩原)



● セリバヒエンソウ



● アメリカフウロ



● シャガ



● アカメガシワ (新葉)



● コンロンソウ



● ミヤマキケマン



● カノコソウ



● ヤマブキ

→
● センボンヤリ



● ホウチャクソウ



● オトコヨウソメ



● カンアオイ
の仲間 (葉)



● アサダ (幹)



● エンレイソウ



● フデリンドウ



● ルイヨウショウマ



● ショウジョウバカマ (葉)



● ヤグルマソウ (葉)

☞ 読者からいただいたおたより ☜

『月報第24号』御恵送頂き真にありがとうございました。今号も盛りだくさん、味読致しました。

高尾山遠征は悪天候で残念でしたね。しかし、少年の心眼は冴えてペンに宿ってますね。これほど綴れるのは御立派です。

関本平八氏の記事、益々光が当たることを祈ります。

現状では比較にならぬほど恵まれているとはいえませんが、田部重治も隠れがち。奥ゆかしささりげなさは充分に知られて厚みを増すもの。多くの人に語られることは大事だと思います。中公文庫に田部先生のないのは当時不思議でしたが、岩波文庫、近年ではヤマケイ文庫でというのは逆に良かったのかなという気がします。

それにしてもドラマチックですね。NHK-FM——大島亮吉——地下書庫——中公文庫——岡田喜秋——田部重治の「山旅」——(再び)岡田喜秋。

次号のモノローグも楽しみにしております。 草々 (白坂正治)

☞ こんな生きものいました ☜



比較的緑の濃い環境で店開きしているためか、昼夜を通じて人間以外の来訪者を迎えることも多い。

6月16日(月)夜9時頃、照明に誘われて迷い込んだセマダラコガネ。



5月3日(土)、御岳山登山に向かうためJR鹿沼駅に急ぐ途中、早朝の府所本町の路上で見たハクビシンの死骸。住宅街に住み着いていたのが、交通事故に遭ったものらしい。戸張町の当店裏庭でも複数の目撃あり。外来動物。南無阿弥陀仏。

つやつやとした柔らかない色の新緑から、力強い存在感の増した深緑へと野山が変わり、季節は春から夏へ向かっているようです。道端や空き地にも様々な色の花が咲き始め、行き交う人の足を止め、人々を笑顔にしています。花は花粉を運んでくれるものによって、虫媒花、鳥媒花、風媒花に分けられるそうです。風にわが身を委ね、運命を託した花は風媒花になりますね…。風媒花は虫媒花や鳥媒花のように美しい花を咲かせたり、美味しい実をつけたりしないので、ただ、ひたすら風が吹くのをじっと待ち続けているのです。私はこの様子を本で読んだとき、生きているものは形が違っていても「生きる姿」は似ているんだなあ…と感じました。杉や檜、樺など現代社会では、花粉症の原因となって、嫌われがちな木々ですが、知らず知らずのうちに誰かを、何かを傷つけていることすら気づかずにいるのです。私たちの中にもたくさんありますよね…。少しだけ、相手を思いやることができればいいなあともそれも自然の中からの学びだと思っています。

子どもの生活の中から失われたもののひとつに「花鳥風月」があると、ある本に書かれていました。教えて理解できるものではなく、心で感じるものなので、体験や経験の中で培われていくものだということです。音と言葉はとても重要な関係性を持ち、例えば「ざわざわ」から連想する言葉は「風」や「心」や「人ごみ」などがあると思います。でも連想できるのは自分の見たものや体験からしかできないのです。このように考えると何が子どもたちに必要なのか、大切なのかが見えてきます。

自然観察クラブの活動は、「大人の楽しみ」を優先に、その中で子どもたちが、たくさん大人の知識をもらい、大人の知識を知恵に変えていくことのできる出逢いの場所だと思います。子どもたちの心の震えを受け止め、更なる成長へと導きあうことができていることに敬服します。今後ともよろしくお願いいたします。

(北光クラブ会長・渡邊 真知子)



愛書家のひとりごと

続・文庫本蒐集の愉しみ

最近の文庫本の出版事情はよくわからないけれど、一昔前であれば、文庫になるような本は名著であろう、と判断できた。したがって、山の本の文庫を集めることは、僕にとっては山の名著を探すことなのである。ちなみに中公文庫の山の本のうち、原著の出版が戦前のものは次のとおりである。

「山―随想―」	大島亮吉
「山と雪の日記」(原著は「遺稿」)	板倉勝宣
「雪・岩・アルプス」	藤木久三
「ヒマラヤに挑戦して」	パウエル・パウアー
「わが山山」	深田久弥
「泉を聴く」	西岡一雄
「北の山」	伊藤秀五郎

これだけの名著が揃っていて、白坂氏が書かれているように、中公文庫に田部の作品がないのは不思議である。全容は明らかでないが、田部作品では戦前の新潮文庫に「山に入る心」「峠と高原」「山と随想」「山と溪谷(紀行篇)」「山と溪谷(随筆篇)」、戦後には角川文庫に「峠と高原」「山と溪谷(紀行篇)」「山と溪谷(随筆篇)」があり、この角川文庫には帯と元パラがかけてある。文庫本とは言え、昭和20年代以前のものには、本来帯や元パラがかけてあるものもあり、そのような完本、さらに初版本の美本を探すとなると結構たいへんな仕事である。古書価は100円～500円が普通だけれど、戦前のものでは1500円～2000円の値のつくものもあるし、僕の持っている中公文庫「日翳の山ひなたの山」(上田哲豊)は昭和54年発行で定価320円。ところが最後の頁に鉛筆で1500円と書いてある。古書店をこまめに探せば100円で手に入るものなのだが。

話がおかしな方向に行ってしまったが、先程の戦前の新潮文庫「山に入る心」「峠と高原」「山と随想」は文庫といっても縦が少し大きい。さらにもう少し大きくなると新書であり、田部作品では昭和29年の民族教養新書「憧れの旅路」(元々社)、昭和30年の山溪山岳新書「山をたたえる心」(山と溪谷社)がある。

さらに新しい文庫としては岩波文庫の「新編 山と溪谷」また、これも文庫版より

少し大きい平凡社ライブラリーに「わが山旅五十年」があり、つい最近、2011年12月には雑誌「山と溪谷」1～3号と共に「山と溪谷」(田部重治選集)が山と溪谷社よりヤマケイ文庫として上梓された。

中公文庫は戦前物は別として、多くの戦後作品を並べてみると、白坂さんも言われるように、田部作品はこの場所にはそぐわない。ウィンパーの「アルプス登攀記」(上下)、志賀の「日本風景論」、小島の「日本アルプス」、尾崎の「山の繪本」、藤木の「屋上登攀者」等、いわば山岳書の古典といえる作品の並ぶ岩波文庫に収まるのが妥当なのだと思う。

今月の表紙、中西悟堂の「野鳥と共に」は創元文庫として昭和27年に発行されている。創元文庫といえば、本誌創刊号の表紙に登場した三木清の「人生論ノート」がそうである。この創元文庫版「野鳥と共に」にはオレンジ色の帯と元パラがついている。帯には「創元文庫 A」という件名分類をあらわす英文字が書かれている。自然科学等はDのはずだが、「野鳥と共に」はA(日本文学一般)の分類となっている。

ところで、中西悟堂著「野鳥と共に」は創元文庫以外には3つの版がある。

「野鳥と共に」(昭和10年12月25日、巢林書房発行) 上製カバー付

「野鳥と共に」普及版(昭和15年7月23日、日新書院発行) 並製

「野鳥と共に」決定版(昭和24年4月15日、講談社発行) 上製カバー付

この3冊の内容はほとんど変わらないが、創元文庫版は原著の面影はほとんどなく、いくつかの著書から作品を集めたアンソロジーと思われる。

(次ページへ続く)



「野鳥と共に」普及版
昭和15年7月23日
日新書院発行



「野鳥と共に」決定版
昭和24年4月15日
講談社発行



「野鳥と共に」
昭和27年1月30日
東京創元社発行

文庫版は原著の文字を小さくしたり、あるいはいくつかの作品を省いて、ポケットに入る大きさのものが欲しい、そして安価に、という読者の要求にこたえるためだけのものと思われるかもしれない。しかし、原著の他に文庫版も持っていなければならない理由もあるのである。

原著にはない文庫本の魅力とはなんだろうか。(つづく、かも)

(阿部良司)



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第25号

2014年6月発行

北光・自然観察クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

(クリーニングハウスあべ内)

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail a2b5r7j7@one.bc9.jp

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

